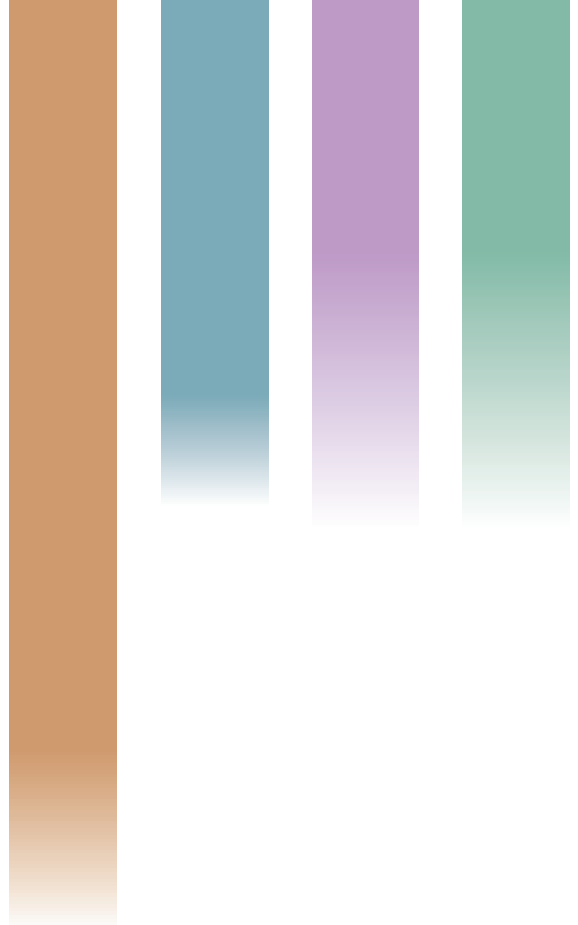




武蔵野美術大学
美学美術史研究室
案内資料

研究室紹介

美学美術史研究室及び美学美術史コースについて

美術大学のなかにわざわざ理論の学科を設けるからには、それ相応の理由がなければならぬ。美学美術史コースは、造形表現そのものを研究することとする。研究対象は、時代であれば原始時代から現代まで、分野としては美術、工芸、デザイン、建築にわたる。

この場合、作者の伝記や意図、図像の意味といった概念的、観念的な側面よりも作品に表されているものそれ自体を感覚、知覚を働かせて解明し、その上で当の作品の意義の探求を目指す。本コースが、美術史、芸術学などとともに実技を学んだ人たちの入学をも歓迎する所以である。

※2004年4月に武蔵野美術大学大学院造形研究科博士（後期）課程造形芸術専攻が開設されており、本コースには「美術理論研究領域」が対応している。



古美術研究旅行

院生が訪問したい地域・施設等を設定し、教員と共に数日間の研究旅行を企画します。



石川県金沢市内各地を訪問 /2019年10月

科目：「造形学演習」

美術館や博物館または仏像修理の現場などに赴き、実際に美術作品を取り扱う現場での貴重な経験を得ます。



「東京美術倶楽部」見学の様子 /2019年5月玉蟲先生撮影

客員教授

北澤 憲昭 KITAZAWA Noriaki
専門分野：日本近代美術史

田中 正之 TANAKA Masayuki
専門分野：近現代美術史

松原 茂 MATSUBARA Shigeru
専門分野：日本美術史

明珍 素也 MYOCHIN Motoya
専門分野：日本美術史、仏像修復

特別講師

松浦 寿夫 MATSUURA Hisao
専門分野：美学

研究室スタッフ

山野井 千晶 YAMANOI Chiaki
専門分野：近現代美術、特にブラジルの参加型作品

鷺見 友佑 WASHIMI Yusuke
専門分野：ファッション / 彫刻

修了生の活動紹介

秋本 真奈帆
飯島 千尋
石松 丈佳
林 碩奎
大澤 慶久
岡山 理香
小野寺 奈津
要 真理子
河野 佑美
櫻庭 美咲
Sarah Teasley
菅原 裕子
杉原 環樹
鈴木 希帆
竹林 佐恵
田中 亜美
築地 正明
土田 泰子
土森 智典
中村 竜太郎
朴 亨國
朴 美姫
藤原（永洌）友子
古澤 かおり
丸山 士郎
三浦 香里
三田 良美
本橋デミル 瞳
森原 英郎

アーティゾン美術館
公益財団法人 大田区文化振興協会
名古屋工業大学 教授
財団法人 仏教文化財研究所 研究室長（韓国）
東京藝術大学芸術学科教育研究助手、関東学院大学非常勤講師
東京都市大学 共通教育部 教授
国立新美術館 学芸課 特定研究員
跡見学園女子大学 文学部 准教授
東京都美術館 学芸員
神田外語大学 専任講師
Head of Programme, Royal College of Art（イギリス）
調布市文化・コミュニティ振興財団
ライター（「美術手帖」や「CINRA.NET」等）
新宿区立漱石山房記念館 学芸員
山種美術館 学芸員
文化庁 非常勤職員
武蔵野美術大学，立教大学，京都造形芸術大学 非常勤講師
長岡工業高等専門学校 一般教育科 准教授
上原美術館 主任学芸員
エディトリアルデザイナー
武蔵野美術大学 教授
東京都江戸東京博物館 学芸員
佐賀県立九州陶磁文化館
富山市ガラス美術館 学芸員
東京国立博物館
早稲田大学 文化推進部文化企画課
立教大学学校社会教育講座学芸員課程 助手
絵師 / 立教大学兼任講師（美術史）
西山美術館 学芸員

〒187-8505 東京都小平市小川町 1-736 12 号館 7 階 709 室
TEL:042-342-6390 FAX:042-342-6076
MAIL:bisiken@musabi.ac.jp

1-736 Ogawa-cho,Kodaira-shi,Tokyo 187-8505,Japan
TEL:+81-42-342-6390 FAX:+81-42-342-6076

博士論文題目

2016

朴 美姫

[近世における日朝絵画交流の研究]

2014

築地 正明

[映像と身体 ―写真、映画に関する考察]

トロフィムチェンコ , ロディオン

[ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンとジャック・ラカンの理論における「見ること」の分裂]

2012

鈴木 希帆

[美術としての「縄文」に関する総合的研究]

修士論文題目

2021

徐 亦凡

[降三世明王像の成立と造形表現に関する考察－西安碑林博物館蔵像を中心に－]

鄧 羽丹

[水月観音菩薩の尊格形成と初期図像に関する一考察－中国における 13 世紀までの在銘作品を中心に－]

橋爪 茉莉花

[1970 年代における草間彌生の制作について－コラージュ作品の分析を中心に－]

2020

鄭 恵升

[韓国の初期抽象彫刻研究 ―中継者としての金鐘瑛を中心に―]

山本 起也

[グリーンバーグと装飾]

2019

王 悦伴

[関根伸夫の早期作品における文脈の分析 ―「位相―大地」を中心に]

齊藤 翔吾

[アリストルフ・レントゥーロフ研究 ―《聖ワシーリイ大聖堂》を中心に―]

高崎 一

[ベンヤミンの Konstellation ～アウラ・大衆・芸術～]

2018

林 菲

[17 世紀後半オランダの風俗画におけるメイドの造形表現に関する研究―フェルメールの作品を中心に―]

朴 映信

[李惟台の作品の中の女性像と「帝展」―1937 年から 1940 年を中心に―]

2015

関 貴尚

[ロバート・スミッソン―そのエントロピーの概念について]

田中 亜美

[円山応挙筆《遊虎図》に関する考察]

2014

古賀 理行

[建築家山田守の戦前期における活動と初期建築観について]

高橋 明子

[山口華楊の画業―大正時代を中心に―]

2013

欧 翔

[田中一光作「産経観世能」ポスターシリーズに関する考察]

鈴木 暁子

[ポール・セザンヌ作《永遠の女性》分析]

田口 貴洋

[ジャクソン・ポロック研究―描かれた「眼」―]

古澤 かおり

[ガッラ・ブラチディア廟におけるモザイク装飾]

2012

秋本 真奈帆

[ヤン・ファン・エイク作『宰相ロランの聖母子』に関する考察]

飯島 千尋

[伝狩野永徳筆「洛外名所遊楽図屏風」についての考察]

石山 直輝

[ミケランジェロ作『バックス』と古代彫刻、または古代彫玉との関係について]

上村 夏実

[ジャン＝ミシェル・バスキアのアプローチーション ―同時代の芸術動向、文学、音楽との関連性についての考察―]

小野寺 奈津

[フルクサス：実践するインターメディア]

2011

杉原 環樹

[ドナルド・ジャッド―その〈脱中心性〉をめぐって]

三浦 香里

[ラファエロ作『変容』の宙に浮かぶキリスト像の成立に関する問題]

2010

有賀 萌

[解体されるスタイル―世紀転換期のフィンランド・デザインにおけるアールヌーヴォーとナショナル・ロマンティズム]

小林 正恵

[在野の思考―長谷川堯論]

2008

赤川 俊範

[アンディ・ウォーホルの作品における死に関する考察]

宇佐美 真理

[仙人掌群鶏図―描かれたモチーフの考察を中心に]

佐藤 笑子

[『玉座の聖母子』への成立について―聖堂タンパン彫刻を中心に]

高橋 静香

[国宝『秋草文壺』における刻画文様の考察]

竹林 佐恵

[江戸後期絵画における画面の内と外―鈴木其一の趣向性の成立とその背景]

朴 美姫

[朝鮮王朝へ贈呈された『牡丹流水図』と『苅田雁秋草図』について]

本橋 瞳

[ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作『七秘蹟祭壇画』の制作背景―フィレンツェ公会議大勅書『エクズルターテ・デオ Exultate Deo』からの影響を中心に]

2007

大澤 慶久

[クレメント・グリーンバーグの美学的形式主義―カント美学の観点から]

2006

トロフィムチェンコ , ロディオン

[芸術と精神分析における媒体の働きと意味]

成 承恩

[ティントレットの作品に表われる宗教的図像と構図―サン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂の作品を中心として]

2005

築地 正明

[ミケランジェロ・アントニオーニ]

森 美穂

[愛知県岡崎市滝山寺三尊像の図像学的考察]

鈴木 香織

[アメリカ都市リアリズムの空間における座視―再現から定見としての新たな画面について―]

山口 亮子

[カンディンスキー―非対称絵画への過程と音楽的要素の関連性]

河野 佑美

[バウハウス・デザイン理念の変遷と実施デザインの相互影響に関する考察]

三田良美

[聖戦美術の変遷―油彩画を中心として]

陸 載和

[四天王像の図像の成立と展開]

2004

古川 明佳

[『ベアトゥス黙示録註解ウルヘル写本』―枠と余白に見る独創性]

2003

太田 雅子

[総持寺蔵・銅板線刻蔵王権現について]

宮本 篤子

[アンディ・ウォーホルにおける芸術的思索―ポップ再考]

2002

渡辺 亮子

[神原泰再考]

2001

鈴木 希帆

[縄文土器における芸術意欲]

土森 智典

[アンリ・マティスの実験的時代における絵画―モダニズム再考と批評の可能性]

森原 英郎

[ユニヴァーサル・タイプフェイスの効力と価値について]

2000

高 雲龍

[黄河文明の光と影―中国近現代芸術の「百花」]

加藤 綾子

[図像集にみる不空羂索観音考]

菅原 裕子

[ウィリアム・ド・モーガンのタイルと空間]

サラ・ティズリー

[1922 年平和記念東京博覧会文化村出品住宅の室内装飾をめぐって]

1998

久郷 雄一郎

[ピカソの分析的キュビズム絵画について]

帖 佐芽

[マーク・ロスコ]

有上 美香

[芹沢銈介の型絵染]

1997

櫻庭 美咲

[江戸期に舶載されたライン炉器についての考察―阿蘭陀陶器の受容とその背景についての諸問題]

土田 泰子

[第一次世界大戦、第二次世界大戦におけるプロパガンダポスターに関する研究]

1996

宮崎 若菜

[ショーンガウアーの『聖アントニウスの誘惑』―その悪魔表現と図像についての考察]

1995

要真理子

[近現代絵画における色彩についての一考察]

佐々木明治

[南イタリア・アプリア派、赤絵式陶器における花中人文の研究]

ニコラ・ベアード

[日本の前衛美術運動―1955 年～ 1966 年]

1994

中村 竜太郎

[マティス―その芸術の展開]

芹澤 由佳

[モーリス・ルイスのヴェイル絵画の特質について]

1993

加藤 高大

[実践の美術史概念]

朴 亨國

[Vairocana の図像に関する一試論―中国と韓国を中心に]

峯村 礎子

[タイ族の伝統的衣服と近代化―中部タイ]

1992

永淵 友子

[17,18 世紀ドイツ諸侯のコレクションに見る輸出古伊万里の編年研究―コレクションの成立年代と輸出古伊万里の様式編年に対する諸考察]

1991

後藤 由佳

[マーク・ロスコ：シーグラムの壁画]

1990

胡 頊城

[留日中国芸術家の中国近代美術に対する影響と貢献]

下村 久美香

[版画の特性と歴史に関する考察―「月映」中心とする作品研究]

石松 丈佳

[社会的存在としてのデザイン―フォルクスワーゲン・ビートルを通しての考察]

岡山 理香

[虚偽論争の歴史的 position 付けについての考察]

張 錨

[三巨匠に学ぶ陶磁の造形と装飾]



專任教員紹介



KIDA TAKUYA

木田 拓也 教授

近代工芸史・デザイン史

1970 年石川県生まれ

早稲田大学第一文学部哲学科卒業

博士（文学）

これまでの研究について

東京国立近代美術館工芸館に 20 年間（1997 - 2017）勤務し、近代工芸、デザインの研究に従事した。

これまでに企画した主な展覧会に、「加藤土師萌」展（1999）、「昭和の桃山復興」展（2002）、「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」展（2003）、「日本のアール・ヌーヴォー 1900-1923」展（2005）、「原弘と東京国立近代美術館」展（2012）、「越境する日本人：工芸家が夢みたアジア 1910s-1945」展（2012）、「東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト」展（2013）、「大阪万博 1970 デザインプロジェクト」展（2015）、「ようこそ日本へ：1920-30 年代のツーリズムとデザイン」展（2016）など。著書に、『工芸とナショナリズムの近代：「日本的なもの」の創出』（吉川弘文館、2014）。日本の近代陶芸における伝統の形成を追跡し、博士論文「昭和の桃山復興：陶芸の近代、伝統の創出」（早稲田大学、2012）で学位を取得した。

最近の研究テーマについて

近年は、20 世紀前半の日本と東アジアにおける工芸・デザインをめぐる交流に関心を向けており、科学研究費により「東アジア地域のデザインに見る交流に関する歴史的研究：中国、台湾、韓国、日本」（挑戦的萌芽研究、2011 - 2013）、「20 世紀前半の日本と中国・台湾・韓国とのデザイン／工芸の交流」（基盤研究 C、2014 - 2016）に取り組み、「越境する日本人：工芸家が夢みたアジア 1910s-1945」展（2012）や「ようこそ日本へ：1920-30 年代のツーリズムとデザイン」展（2016）などを企画した。

日本の近代における工芸とデザインを、ナショナリズム、国家プロジェクト、国家イベントとの関係から捉え直すとともに、欧米との関係だけでなくアジアとの交流を念頭に日本の伝統や日本的なものについて、また、21 世紀の手仕事の行方を探る。

近年の主要論文

- ・「グルチャラン・シンの陶磁器コレクションから見えてくるもの：インド人留学生が見た 1920 年頃の日本の陶芸」『美史研ジャーナル』14 号、70-85 頁、2018 年 3 月。
- ・「現代工芸とデザインの地平——クレイワークとうつわ」『現代アート 10 講』武蔵野美術大学出版局、176-193 頁、2017 年 4 月。
- ・「大連における中国陶磁の研究：大正期の小森忍と旬雅会のネットワーク」『東京国立近代美術館研究紀要』第 21 号、6-34 頁、2017 年 3 月。
- ・「工芸家夢想中的亜州」『東北亜外語研究』Vol. 4, No.2, Jun. 2016, 10-18 頁(宋剛訳)。
- ・「万博にみられる日本陶磁の正統：フィラデルフィア万博（1876 年）とパリ万博（1878 年）における日本陶磁史のプレゼンテーション」『ジャポニスム研究第 35 号別冊』ジャポニスム学会、67-76 頁、2016 年 3 月。
- ・「ようこそ日本へ：日本の『自画像』としての観光ポスター」『ようこそ日本へ 1920-30 年代のツーリズムとデザイン』展図録、6-10 頁、2016 年 1 月。
- ・「亀倉雄策における『日本的なもの』：東京オリンピックのデザインワークから見えてくるもの」『生誕 100 年亀倉雄策展』図録、新潟県立万代島美術館、2015 年 7 月、71 - 75 頁。
- ・「大阪万博 1970 デザインプロジェクト——「人類の進歩と調和」をめざして」『大阪万博 1970 デザインプロジェクト』展図録、11-15 頁、2015 年 3 月。
- ・「板谷波山がめざしたもの」『出光美術館館報』第 167 号、4-27 頁、2014 年 5 月。
- ・「社会のなかのオリンピック、そのなかのアートとデザイン」『社会システム＜芸術＞とその変容：現代における視覚文化／美術の理論構築』科学研究費補助金基盤研究（A）報告書、62-70 頁、2014 年 3 月。
- ・「渡辺素舟と昭和初期の『工芸美術』」『叢書・近代日本のデザイン』第 52 巻『現代日本の工芸美術』解説 ゆまに書房、281-286 頁、2013 年 10 月。
- ・「ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008: 工芸／CRAFT の行方」『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号、34-47 頁、2013 年 3 月。
- ・「大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会／彩壺会／東洋陶磁研究所：大正期を中心に」『東洋陶磁』第 42 号、15-35 頁、2013 年 3 月。
- ・「東京オリンピック 1964 そのデザインワークにおける「日本的なもの」」『東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト』展図録、8-14 頁、2013 年 2 月。
- ・「『无型』の誕生：新興工芸運動の旗手たち（1）、（2）」『叢書・近代日本のデザイン 44、45』ゆまに書房、273-276 頁、413-416 頁、2012 年 7 月。
- ・「实在工芸美術会：『用即美』『工人社』のあゆみ」『叢書・近代日本のデザイン 46』ゆまに書房、141-144 頁、145-148 頁、2012 年 7 月。
- ・「工芸家が夢みたアジア：工芸の「アジア主義」」『越境する日本人：工芸家が夢みたアジア 1910s-1945』展図録、10-19 頁、2012 年 4 月。

著書

- ・『工芸とナショナリズムの近代：「日本的なもの」の創出』（吉川弘文館、2014）
展覧会図録（図 a）
- ・「昭和の桃山復興：陶芸近代化の転換点」展（2002）（図 b）
- ・「越境する日本人：工芸家が夢みたアジア 1910s-1945」展（2012）（図 c）
- ・「東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト」展（2013）（図 d）
- ・「大阪万博 1970 デザインプロジェクト」展（2015）（図 e）



a



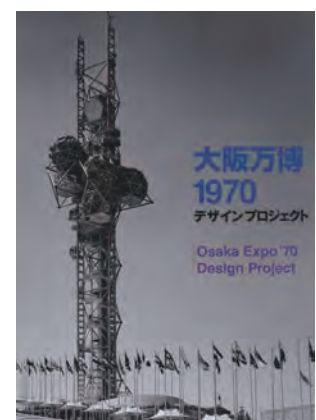
b



c



d



e



KITAZAWA YOKO

北澤 洋子 教授

西洋美術史、西洋工芸史

1958 年神奈川県生まれ

東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程単位取得満期退学

研究テーマ

初期ネーデルラント絵画史・ルネサンス期イタリアとネーデルラントの美術交流・西洋ガラス工芸史。

初期ネーデルラント絵画の諸問題、絵画空間の現象性、ガラス工芸技法の独自性、ガラス工芸作品の量産性と美的価値などを研究

研究業績

著書：『世界美術大全集』第14巻「北方ルネサンス」小学館（共著）、『世界ガラス工芸史』美術出版社（共著）、『西洋美術史』武蔵野美術大学出版局（編・共著）、『西洋美術の歴史5 ルネサンスⅡ 北方の覚醒、自意識と自然表現』中央公論新社（共著）ほか。

論文：「ガラス凸面鏡と絵画空間」『民族芸術』Vol.13、「絵画に見るヴェネツィア・ガラスの揺籃期」『GLASS』33号、「十五世紀後半のフィレンツェ絵画に果たしたロヒール作『哀悼』の役割」『美術史』129号など。

訳書：E・ホール著『アルノルフィーニの婚約』中央公論美術出版（共訳）ほか。
美術史学会、美学会、民族芸術学会、日本ガラス工芸学会、日仏美術学会、所属。

最近の研究について

大学院開設科目『西洋美術史研究』では、「再現性の可能性もしくは限界」をテーマにしています。

西洋美術は、中世の一時期を除き、確かに写実的な再現性の展開でした。しかし同時に、再現性の可能性を探求した芸術家自身が、再現性の限界を最初に認識していたからです。

イタリア・ルネサンス及び同時代のネーデルラント絵画を主な対象としています。合わせて、各時代の焼き物への絵付け、聖堂内部の壁面装飾、描かれた凸面鏡に映じた空間、などについて、支持体自体がもっている空間と描かれた絵画空間との関係を考えています。

研究者として当初から初期ネーデルラント絵画史に取り組んでいます。ヤン・ファン・エイクによる一部作品以外には、記名も年記もほとんど記録もない作品の、互いに絡んだ糸を様式判断と図像学の手法によってほぐすことが、研究課題です。一点一点の作品の比較研究により、膨大な美術史の流れは編まれ、美術史学が成立しているからです。

美術史学は歴史学ですが、作品を文字資料と同じように読み解くだけならば、作品の質は問題にされないことになってしまいます。図像を解釈する力と、鑑賞眼・様式判断をする力、のバランスが大切です。

西洋のガラス史も興味深いものです。光を捉えて眼に映すガラスは、神性を視覚化するのに適した素材でもあります。フランク・ガラスとステンドガラスの発生、描き込まれたガラス器に着眼した絵画の新解釈などについての論考があります。工芸史といわれる分野にはまだまだ新しい切り口がありそうです。

修士課程「美学美術史コース（旧称 造形理論・美術史コース）」は、学内に直結する学部学科を持たないコースです。だから（あるいはだからこそ）所属人数は多くはないものの、目的意識のしっかりした学生を迎えていると思います。西洋美術史専攻の方に限っても、修了後に学部の母校に戻って学内博物館の学芸の職に就いている方、地元の公務員試験を通して新設県立美術館の学芸員になっている方、学部で油絵を修士で美術史を修め美術館の生涯教育に特化してスキルを磨き都内私立美術館でついには常勤の職に就いた方、たちがいます。一人一人の研鑽の結果に他ならないのですが、在籍中に専任教員全員同時参加の演習科目『造形学演習』における研究発表の積み重ねにて実力を積まれていると自負しています。

- ・ヒューボ・ファン・デル・フース 羊飼いの礼拝（ポルティナーリ祭壇画中央パネル）部分（図 a）
- ・ドメニコ・ヴェネツィアーノ 聖母子と諸聖人（サンタ・ルチーア・デイ・マニョーリの祭壇画）（図 b）
- ・レオナルド・ダ・ヴィンチ キリストの洗礼（部分）（図 c）

作品 3 点共 フィレンツェ ウフィツィ美術館所蔵



a



b



c



玉蟲 敏子 教授

TAMAMUSHI SATOKO

日本美術史

博士（文学）

略歴：静嘉堂文庫美術館学芸員、東京国立文化財研究所情報資料部調査員（兼任）等を経て現職。文化審議会専門委員を始め、町田市立博物館運営委員、国立市文化財保護審議会委員、足立区立郷土博物館文化遺産調査員などを務める。

2007-2008 年度学長補佐。

2012 年度国内研究員。

2009 年 ハイデルベルク大学客員教授。

2018 年 紫綬褒章受章。

研究テーマ

卒業論文砥執筆以来、〈美術〉や〈工芸〉〈デザイン〉といった領域の境がなく、また文学とも視覚のレベルで関わり合う日本美術の融合的な性格に魅力を感じ、その平安時代から近代にいたる展開や背景にある理念を探究しています。その成果は、編集委員の一人として参画した編著、『講座日本美術史5〈かざり〉と〈つくり〉の領分』（東京大学出版会、2005 年）において、披露しています。

最近では、東京の足立区や国立市谷保の豪農や商家が江戸以来、継承してきた文人文化に関心をもっています。フィールドワークを重視する「地域美術史」を構想しているところです。

専門として掲げているのは、まず、江戸時代の「琳派」の研究。2004 年に 博士学位を取得した博士論文の題名もずばり、「〈琳派〉と日本の造形文化」です。酒井抱一の代表作について論じた『絵は語る 13 夏秋草図屏風』（平凡社、1994 年、第 16 回サントリー学芸賞）のほか、代表的な十点の作品を選び、江戸の都市空間に開いてその画業を考察した『都市のなかの絵——酒井抱一の絵事とその遺響——』（ブリュッケ、2004 年、第 16 回国華賞）、没後から現代まで近世・近代を縦断して尾形光琳の受容史をたどった『生きつづける光琳』（吉川弘文館、2004 年）、『俵屋宗達一金銀のくかざり〉の系譜——』（東京大学出版会、2012 年、第 63 回芸術選奨文部科学大臣賞）などの著作を公にし、琳派三部作が完結しました。

武蔵野美術大学に来てから取り組むようになったテーマは、幕府御用絵師の狩野家に関する研究です。2003～2005 年、2006～2008 年の二期六カ年にわたり科学研究費補助金を受け、「江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究―『古画備考』を中心に―」というテーマに取り組みました。2013 年 2 月に、研究成果公開促進費をいただいて、古画備考研究会編『原本『古画備考』のネットワーク』（思文閣出版）を刊行し、続けて出光文化福祉財団（当時）の出版助成を受けて『校訂 原本 古画備考』（思文閣出版）を刊行しました。

授業で心掛けていること

学生にとって近くて遠い日本美術から、親しい存在へ

そんな願いから、外国人の日本美術研究者を招聘し、あるいは海外での公演の反響を伝えるなど、日本美術が世界の各地でコレクションされ、学ばれている実態を紹介しています。特に欧米の美術館におけるウェブ環境の整備は目覚ましく、ニューヨークのメトロポリタン美術館や大英博物館などの日本美術コレクションのウェブサイトを開けば、たやすく無料で高精細の画像をダウンロードすることができます。背景にあるパブリックドメインの考え方を学び、それらの有益な活用法を身に付ける機会にしていきたいと考えています。

このように、日本美術をなるべく客観的な視点から見るができる機会を積極的に作るとともに、少人数の授業では、美術館・図書館の所蔵する複製の絵巻物や江戸の絵入り本などを活用し、ときには修理工房を見学するなど、モノから興味を持ってもらおうと工夫を凝らしています。

著作

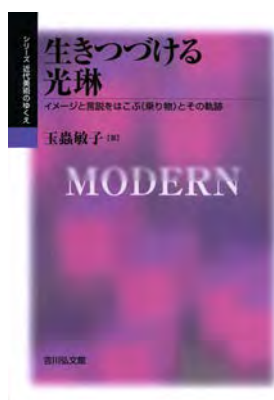
- ・『講座日本美術史 5 〈かざり〉と〈つくり〉の領分』共編著，東京大学出版会，2005 年（図 a）
- ・『絵は語る 13 夏秋草図屏風』平凡社，1994 年（図 b）
- ・『原本『古画備考』のネットワーク』思文閣出版，2013 年（図 c）
- ・『校訂 原本 古画備考』全 5 巻索引付 共編著，思文閣出版，2022 年（図 d）

琳派三部作

- ・『生きつづける光琳』吉川弘文館，2004 年（図 e）
- ・『都市のなかの絵―酒井抱一の絵専とその追響』ブリュッケ，2004 年（図 f）
- ・『俵屋宗達―金銀の〈かざり〉の系譜―』東京大学出版会，2012 年（図 g）



写真: 仁井本大介



e

f

g

a

b

c

d



朴 亨國 教授

PARK HYOUNGGOOK

日本・東洋美術史、
仏教彫刻史、密教図像学

韓国 慶尚北道高靈郡生まれ

1989 年 2 月、韓国 延世大学校 文学部 史学科卒業

1994 年 3 月、武蔵野美術大学大学院 美術専攻 造形学コース（現、
美学美術史コース）修了

1998 年 3 月、名古屋大学大学院 文学研究科 博士後期課程（美
学美術史専門）修了、文学博士

1995 ～ 2019 年、愛知県史編纂委員会 文化財部会特別調査委員
（仏教彫刻担当）

1996 ～ 2000 年、日本学術振興会 特別研究員（DC 2 および外
国人特別研究員、哲学・仏教美術史）

1997 ～ 2003 年、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（J S A）
美術史班 班長

1999 ～ 2002 年、国際日本文化研究センター 共同研究員

2002 年 4 月、武蔵野美術大学 造形学部 助教授（2007 年 4 月教
授、現在に至る）

2003 ～ 2013 年、東京大学 東洋文化研究所 共同研究員

2014 ～ 2019 年、韓国・韓国文化財財団 研究委員、考証研究委
員

その他、名古屋大学、愛知県立芸術大学、東洋大学、学習院大学、
金沢美術工芸大学などで非常勤講師を勤める

主な著書

- ・『日本美術館』（共著、小学館、1997 年 10 月）
- ・『アジア美術史』（共著、京都造形芸術大学通信教育部、1999 年 1 月）
- ・『中国密教』（共著、春秋社、1999 年 11 月）
- ・『カラー版 東洋美術史』（共著、美術出版社、2000 年 2 月）
- ・『ヴァイローチャナ仏の図像学的研究』（単著、法蔵館、2001 年 2 月）
→博論、第 13 回国華賞（奨励賞）や第 1 回日韓仏教文化学術賞などを受賞

- ・『観音菩薩像の成立と展開―変化観音を中心にインドから日本まで―』（共著、シルクロード学研究センター、2001年3月）
- ・『岩波仏教辞典』（第二版）（共著、岩波書店、2002年10月）
- ・『バイヨン寺院全域の保存修復のためのマスタープラン』（共著、日本国政府アンコール遺跡救済チーム・財団法人日本国際協力センター、2005年6月）
- ・『大日如来の世界』（共著、頼富本宏編、春秋社、2007年11月）
- ・『権鎮圭』（企画・編著、展示図録、東京国立近代美術館・武蔵野美術大学美術資料図書館・韓国国立現代美術館、2009年10月）→武蔵野美術大学創立80周年記念展示
- ・『増補新装 カラー版 東洋美術史』（共著、美術出版社、2012年3月）
- ・『愛知県史 別編 文化財3 彫刻』（共著、愛知県史編纂委員会編集、愛知県、2013年3月）
- ・『日本美術全集 第3巻 奈良時代Ⅱ 東大寺・正倉院と興福寺』（共著、小学館、2013年8月）
- ・『巨匠李快大 解放の大叙事』（共著、特別展図録、国立現代美術館企画、トルペゲ、2015年7月）
- ・『東洋美術史』（監修・共著、武蔵野美術大学出版局、2016年3月）
- ・『アジア仏教美術論集 東アジアⅥ 朝鮮半島』（責任編集・共著、中央公論美術出版、2018年5月）
- ・『アジア仏教美術論集 東南アジア』（共著、中央公論美術出版、2019年2月）→ Paju Book Awards 2019 企画賞（共同受賞・受賞者代表）受賞
- ・『帝国美術学校の誕生―金原省吾とその同志たち―』（監修・共著、武蔵野美術大学 美術館・図書館、2019年10月）→ 武蔵野美術大学創立90周年記念展示
- ・『膠を旅する』（共著、内田あぐり監修、国書刊行会、2021年5月）

最近、調査研究した作品

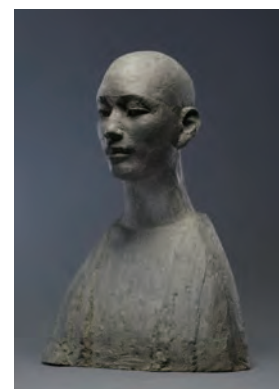
- ・インド・女神カウリー像，6世紀，Bhadami Museum（図a）
- ・韓国・石窟庵本尊，751年頃（図b）
- ・権鎮圭「比丘尼」，テラコッタ，1967年（図c）
- ・中国・金製阿嵯耶観音菩薩立像，雲南省博物館所蔵，12世紀（図d）
- ・カンボジア・バイヨン寺院の守護神，12世紀末（図e）



a



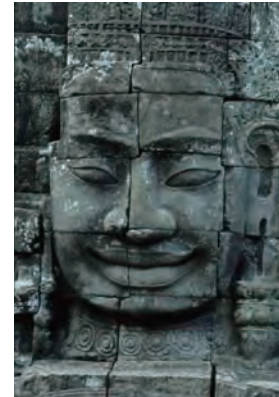
b



c



d



e



MAEDA KYOJI

前田 恭二 教授

日本近現代美術史

1964 年、山口市生まれ。1987 年、東京大学文化学部美術史学科を卒業し、読売新聞社へ入社。美術分野を取材したほか、文化部長などを歴任。単著に『やさしく読み解く日本絵画 雪舟から広重まで』（2003 年 8 月）。『絵のように 明治文学と美術』（2014 年 9 月）。同書で、芸術選奨文部科学大臣新人賞（評論その他部門）。2021 年度末に退社し、本学教授に着任。

研究テーマ

専門分野は日本美術史。特に、文学・文化史を視野に収めた近現代美術史研究。あわせて、社会における美術の位置に関する考察など。近年は、おもにアフリカ系アメリカ人アーティストについての研究を進めている。

研究業績・著書

『やさしく読み解く日本絵画 雪舟から広重まで』（図 a）

（新潮社・とんぼの本、2003 年 8 月）

読売新聞日曜版「絵と人のものがたり」に加筆・改稿した著作。副題に言う雪舟と歌川広重に加え、狩野永徳、長谷川等伯、俵屋宗達、尾形光琳、英一蝶、池大雅、円山応挙、伊藤若冲、葛飾北斎の 11 人を取り上げ、それぞれ数年の代表作を読み解く。近世以前の絵画へのイントロダクションを読者へ提供するとともに、出版当時、新たに紹介された史料や注目すべき見解を取り込み、アカデミックな美術史研究の成果を、ジャーナリズムへ接続することを図った。

『絵のように 明治文学と美術』（白水社、2014 年 9 月）（図 b）

美術に関し、明治の文学者が残した小説等のテキストをリサーチし、書き手と受容層が暗黙裡に共有していた美術のイメージや隣接ジャンルの葛藤などを考察した。1889 年発表の小説「蝴蝶」をめぐる、裸体画問題を再考した序章にはじまり、仏像と文化財概念、博覧会の油彩画、写生の諸問題、骨董の意味、浮世絵再評価など 12 のテーマを扱っている。比較文化的なアプローチであるとともに、より広範に活字文献を使えないかという史料拡張の提案でもある。



a



b

研究のスタンス

1. 独学の人間として

研究者としてみると、私の経歴はかなり変わっているのかもしれませんが。確かに30年以上前には大学で美術史のトレーニングを受けています。もっとも、その後は長きにわたり、新聞社のジャーナリストとして美術分野に関わりつつ、同時に、独学（self-taught）の人間だったからです。そのことは、日本近現代美術史を主たるフィールドに選んだことにも関わっています。

日本近現代美術史への関心は、ひとつには1990年前後、すぐれた研究者たちによる、明治期の「美術」概念や美術制度の形成の検証作業に触発されたものです。自分自身、かつて大学で学んだのは古美術でしたから、近代以降の美術史を学ぶ必要を感じていましたが、それに加えて、近現代美術史にはひとつ、独学の人間にとっての大きなメリットがありました。

近代以降の活字メディアは、爆発的に拡大します。それゆえに史料としては、作品そのものや肉筆の書簡等が優先されるとともに、新聞・雑誌などのテキストが大きなウェイトを占めます。美術家たちも、挿絵のような形で、多かれ少なかれ活字メディアと関係を持ちます。この点は近世以前の美術史とは異なる点であり、その活字文献は独学の人間にとっても比較的アクセスしやすく、その量的な多さからして、未開拓の史料があっただけでなく、おかしくないからです。

まったくの独学者として、リサーチを行った二冊目の著書『絵のように 明治文学と美術』は、専門雑誌などの美術フィールドにおける史料に比べて、おそらくは副次的なものとなされていた文学者たちのテキストから、いかに美術史的な知見を引き出せるかというトライアルでした。

言い添えておくと、独学者としては、恣意的な方向に陥ることも懸念されたため、あらかじめ3段階の作業プログラムを設定しました。第1段階は、一定のセクションを経ているだろう文学全集100巻から、何らか美術に関する言及を、無作為的に抜き書きすること。続いて、そこに頻出する固有名詞やフレーズに着目し、分類を行いました。この作業により、文学者が美術に関して、いかなる関心を持っていたのかを析出させ、個別に取り組む10件ほどのトピックを決定しました。これが第2段階です。最後のステップは、それらのトピックに即して、文献的踏査や先行論文の確認といった通常の研究手順を踏む・・・というものでした。何を研究するかということよりも、どうタスクを進めるか、というプログラムを先に決定したわけです。奇妙な手法であったかもしれませんが、研究トピックの客観性を担保できるメリットはあっただろうと思います。

2. 現在の研究テーマ

現在、リサーチしているのは、水島爾保布（1884～1958年）という人物です。谷崎潤一郎と組んだ挿絵本『人魚の嘆き・魔術師』（1919年）によって、ビアズリー風の絵を知る人もあるでしょう。この挿絵本は最近、復刻版が刊行されました。私は解説を寄稿し、本書の成立事情を明らかにした上で、出版当時のシノワズリーの高まりに言及しています。

また、大正前半期の前衛グループ「行樹社」の創立メンバーであったことや、関東大震災を記録した画文の仕事がわずかに言及されたこともあります。実のところ、これまでの近代美術史では、ほとんど中心的な考察の対象になったことのない人物でした。

その水島に、私が興味をもったのは、やはり近代日本における活字メディアと美術という関心に即してのことです。つまり、前著『絵のように 明治文学と美術』を書き終えた後、次の研究フィールドは明治に続く時代にしたいとの考えから、大正初期に存在した同人雑誌「モザイク」を閲読してみました。するとひとり、そこに特異というしかない美意識を備え、驚異的に筆のたつ人物がいることに気づきました。それが水島爾保布だったわけです。

爾来、図書館や文学館、古書市場等で披見可能な史料を収集してきました。水島の活躍期は明治・大正・昭和の三代にわたり、なおかつ展覧会等での発表以上に、出版メディアに膨大な絵と文章を残しています。大正半ばからは時事コラムを延々と書き継ぎ、昭和初期の「円本」時代を境に漫画家としてふるまいつつ、ひとりの画家として、文人画風の画境を深めていきます。それらの仕事の雑多さ、また、都会人らしい自己韜晦にもかわかわらず、その博識さや知的水準は、武林無想庵や長谷川如是閑といった人々と長くつきあったことが物語るように、美術家としては、ちょっと類を見ないものがあります（要は、すっかり惚れこんでいるわけです）。むろん画家としても、文壇的にも、成功した人物ではありません。その仕事の多面性はおそらく細分化したディシプリンによっては捕捉できないでしょう。もっとも、水島の軌跡をたどることで得られるものは少なくありません。たとえば、成功しえなかった画家たちの生活誌。彼らはいかなる形で食いつないでいたのか。膨大なテキストを残し、つぶさに動静を把握できる水島の生涯は、興味深い実例と言えます。ほかにも新聞漫画の隆盛、児童文学の隆盛といった出版ジャーナリズムのトピックにも意外なことに、水島は決定的な形で関わっています。そうした人物像や知見を包括的に記述するため、ストレートな評伝を執筆しているところ です。

3. 講義で目指すもの

さて、こうした私の経験が、大学での教育に役立つのかどうか。

おそらく明確なディシプリンに即した指導には、あまり貢献しないだろうと思います。ちょっと違った視点を提供するといった程度かもしれません。

もっとも、率直なことを言えば、大学で学んだ後も研究機関に所属し、学び続けられる人ばかりでもなさそうです。まさに私自身がそうであったように。だからと言って、いったん美術に興味を持ち、大学で学んだ方々が結局、美術から遠ざかってしまうのは、惜しいことです。

だとすれば、私が手助けできることは、研究機関に所属してもしなくても、日々の環境が変わったとしても、美術に触れ、考え続けられる土台作りかもしれません。その土台とは、ひとつには基本的な知識には違いない。しかし、もっと大切なのは、見ることと考えること、つまり目と頭をしなやかに連動させる「習慣」なのでしょう。それは単純に、楽しいことでもあります。講義を通じ、目と頭がつながってくる感覚、その楽しさを伝えられたら、と思っています。

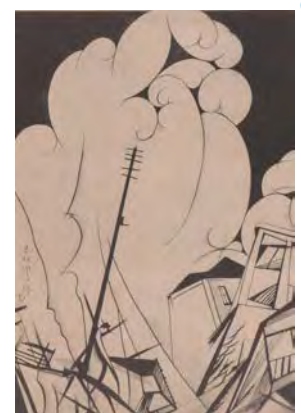
水島爾保布関係

作・谷崎潤一郎、絵・水島爾保布『人魚の嘆き・魔術師』（春陽堂、原著は1919年、復刻版は2020年）（図c）

水島爾保布『愚談』（厚生閣、1923年）より、章扉「根岸より」（図d）

金尾種次郎編『関東大震災画帖 東京十画伯実写』（金尾文淵堂、1923年）より、水島爾保布「表現派その俎」（図e）

画帖「聯環連珠」より、水島爾保布「朝鮮金剛山」（昭和時代）（図f）





MURAKAMI HIROYA

村上 博哉 教授

西洋近現代美術史

1960 年愛媛県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。愛知県美術館学芸員・主任学芸員、国立西洋美術館学芸課長・副館長を経て、2021 年 4 月より現職。

研究テーマ

西洋 20 世紀美術史。特に、抽象美術、キュビズム、ダダ、シュルレアリスムなど。

研究業績

1988 年から愛知芸術文化センター愛知県美術館の開設準備に携わって以来 30 年余り、美術館の学芸員を務めました。20 世紀以降の日本・西洋の美術を活動対象とする愛知県美術館では、ヨーロッパ近代美術コレクションの形成に関わり、フォーヴィスム、キュビズム、未来派、抽象、ダダ、シュルレアリスムなどの前衛動向を代表する作品の収集を行うほか、フランティシェク・クプカ、ジョアン・ミロ、昭和前期の画家松本竣介などに関する展覧会を企画しています。

2006 年から 2021 年まで勤務した国立西洋美術館では、学芸部門の責任者として館の運営全般とコレクションの管理にあたり、19 世紀から 20 世紀初頭の作品の収集、海外美術館のキュレーターとの共同企画による展覧会の開催、美術館本館の設計者ル・コルビュジエに関する展覧会の企画・実施などに取り組みました。また、並行して 2007 年から 2015 年まで全国美術館会議の事務局企画幹事を務め、海外美術展の開催を政府が支援する美術品補償制度の設立や、東日本大震災後の文化財レスキュー事業に携わりました。

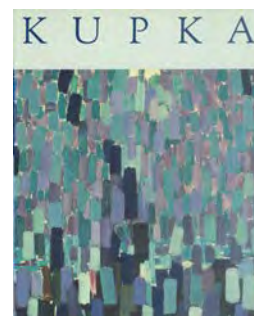
美術館での研究対象は西洋近代の絵画が中心でしたが、建築、デザイン、映像を含む造形文化の領域全般において制作の実践と研究・教育を行っている当大学の環境は、大きな刺激を与えてくれます。この環境のもとで自分自身の視野を広めることに努めながら、専門分野の研究と教育に取り組みたいと考えています。

主要著書・展覧会カタログ

- ・『クプカ展』（共編著）愛知県美術館ほか・東京新聞、1994 年（図 a）
- ・『近代美術の 100 年 愛知県美術館のコレクション』（編著）愛知県美術館、1998 年（図 b）
- ・『ミロ展 1918-1945』（編著）愛知県美術館ほか・中日新聞社、2002 年（図 c）
- ・『スケーエン：デンマークの芸術家村』（編著）国立西洋美術館・西洋美術振興財団、2017 年（図 d）
- ・『西洋美術の歴史 8 20 世紀』（共著）中央公論新社、2017 年（図 e）
- ・『ル・コルビュジエ 絵画から建築へーピュリスムの時代』（編著）国立西洋美術館・東京新聞、2019 年（図 f）

主要論文など

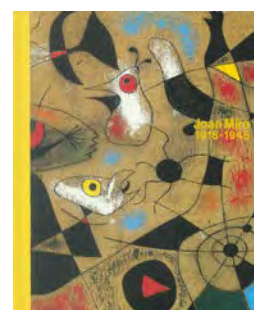
- ・「マックス・エルンスト《ポーランドの騎士》」『愛知県美術館研究紀要』3 号、愛知県美術館、1996 年 3 月、11-28 頁。
- ・「写す画家、松本竣介」『没後 50 年 松本竣介』（展覧会カタログ）、練馬区立美術館他・共同通信社、1998 年 10 月、175-187 頁。
- ・「シュルレアリスムと画中画 マックス・エルンストを中心に」『西洋美術研究』3 号、三元社、2000 年 3 月、140-158 頁。
- ・「自己イメージの弁証法—松本竣介《画家の像》、《立てる像》、《五人》《三人》の解説（上）」『美術研究』383 号、東京文化財研究所、2004 年 8 月、34-49 頁。
- ・「自己イメージの弁証法—松本竣介《画家の像》、《立てる像》、《五人》《三人》の解説（下）」『美術研究』384 号、東京文化財研究所、2004 年 11 月、18-43 頁。
- ・「新収作品 ジョルジュ・ブラック《静物》」『国立西洋美術館報』44 号、国立西洋美術館、2011 年 3 月、11-13 頁。
- ・『『みんな落ちるだろう』—ゴヤにおける墜落のイメージ』『ブラド美術館所蔵 ゴヤ 光と影』（展覧会カタログ）、国立西洋美術館・読売新聞社、2011 年 10 月、56-63 頁。
- ・「ミロの寡黙な絵画」『日仏美術交流シンポジウム シュルレアリスムの時代—越境と混淆の行方』日仏美術学会、2012 年 6 月、89-99 頁。
- ・「新収作品 ポール・セザンヌ《ポントワーズの橋と堰》」『国立西洋美術館報』47 号、国立西洋美術館、2014 年 3 月、8-11 頁。
- ・「〈抽象＝創造〉とその余波」天野知香編『西洋近代の都市と芸術 3 パリ II』竹林舎、2015 年 12 月、395-414 頁。
- ・「新収作品 エドガー・ドガ《舞台袖の 3 人の踊り子》」『国立西洋美術館報』51 号、国立西洋美術館、2018 年 3 月、10-12 頁。
- ・「ツァラとミロー芸術の幼年期」『石井コレクション研究 7 トリスタン・ツァラ『反頭脳』』、筑波大学芸術系、2020 年 3 月、37-58 頁。



a



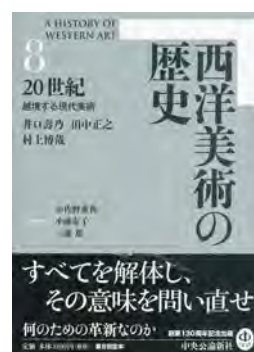
b



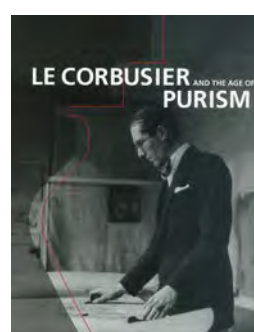
c



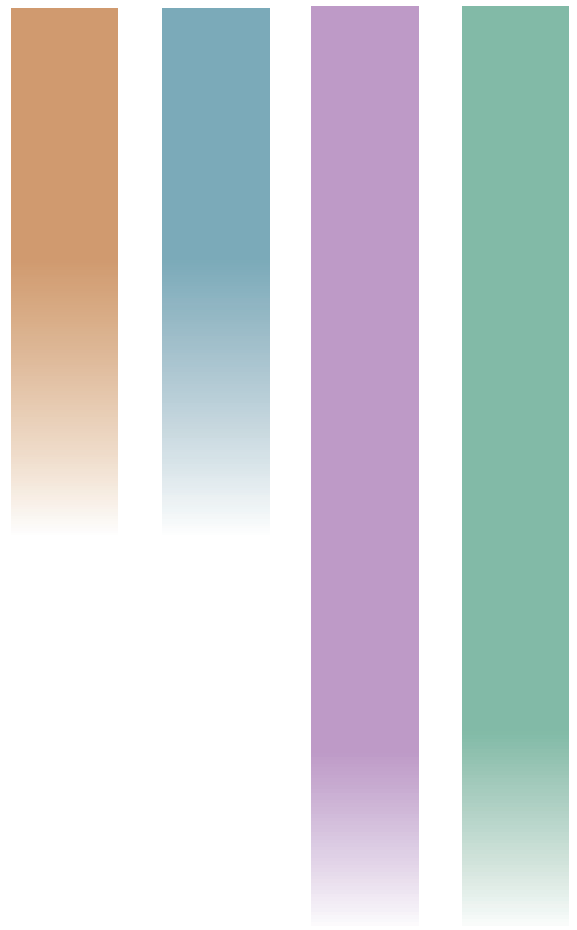
d



e



f



大学院生紹介



Raffles College of Design and Commerce

(ラッフルズ・カレッジ・オブ・デザイン・アンド・コマース)
ファッション・マーケティング専攻 卒業

The State University of New York, Stony Brook, (ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校) 大学院 美術史専攻 修了

研究内容

私は、ニューヨーク州立大学ーストーンビレッジ校の修士課程での2年間、19世紀と20世紀の現代芸術を研究対象として関係講義を選び、西洋と中国の現代芸術に関する論文を書きました。

私が二年間学習した内容のメインテーマで、19世紀末期の現代芸術家、芸術理論と評論、並びにこれらの芸術作品と文章のコンテキストは私の研究する重点です。19世紀のフランスは、資本階級が生まれ、芸術の流派も多様化を見せるようになりました。公の学校が推薦する新古典主義から小資産階級の現代生活を記録する印象派まで、フランス19世紀の芸術を研究することは、政治、階級並びに資本の芸術世界に対する影響を十分に理解することになりました。

2015年の秋、私の研究方向をフランス芸術に影響を受けた中国の20世紀初期の芸術に向ける事としました。当時の芸術作品の中にも特殊な国情の中の現代性を含んでいると考えます。それは、海外経験、西洋の資産階級生活と意識形態の衝突、抽象性、感情の開放とヌードなどです。早期の20世紀芸術は試験的、模倣的、未成熟ですが、これらの芸術家は当時の文芸人たちが心の声を表現し概念を開放したいという切実な気持ちを反映しているからです。

2018年から、武蔵野美術大学で、芸術社会史の方法を通じて、19世紀末から20世紀初めに始まった芸術家の留学ブームがもたらした変革を整理しています。

2019年に武蔵野美術大学で開催された「国際カンファレンス：東アジアにお付けするブデル・インパクラ」で「想像の体：エコルル・ド・パリスの中国人画家、常玉（Sanyu）の作品にお付けするハイドレート」を発表しました。2020年には上海で設立された前衛芸術団体「決瀾社」に関する研究が行われ、博士中期発表会で発表されました。



鄭 惠升

JEOUNG HAESEUNG

博士課程

武蔵野美術大学 大学院造形研究科 修士課程 美術専攻
造形理論・美術史コース 修了

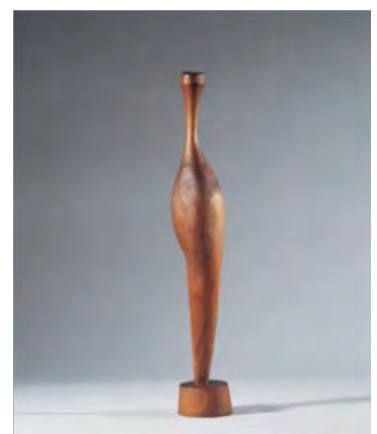
研究内容

韓国に抽象表現が導入される過程で、韓国の抽象表現は日本留学生と海外から入ってくる雑誌や画集に大きく頼っていました。実物の作品を見ることができた状況ではなかった当時の韓国の作家は、美術雑誌などに掲載している写真を見て似たような作品を製作し、新しい表現方法である抽象表現を理解しようとしました。実物を見ることができず、写真や雑誌などの資料にも円滑に接することができない状況のなかで、自分が見たものを模倣しながら学習することは、新しいものを受け入れ、理解するための必須過程だったはずであり、芸術作家の本能的な活動だったはずです。

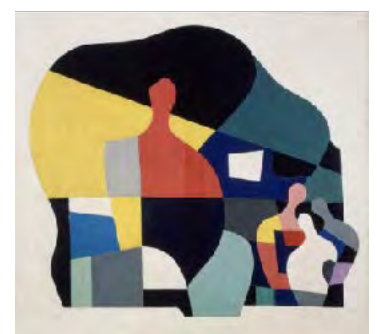
修士課程で韓国の彫刻家である金鐘瑛がどのように西洋発の表現方法を受け入れ、自分の造形言語を作り出したのかに対する調査を進めました。その結果、韓国の初期抽象表現を深く理解するためには、様式受容を重要なテーマとして取り入れる必要があると考えるようになりました。様式受容は芸術において原論的な問題だと思います。様式受容をより哲学的かつ根本的に理解した後、韓国初期抽象表現の形成過程で見られる様式受容に関する研究を進め、韓国の初期抽象彫刻をより根本的かつ哲学的に理解したいと思います。様式受容に対する美術史的背景と哲学的理解を通じて韓国の初期抽象作家の精神世界と美術理論的意義を深く研究することを目標としています。

図版

- ・「 Rond 」 金煥基 1938 年 61 x 72.7 c m (図 a)
- ・「 鳥 」 金鐘瑛 1953 年 木 55.5 x 9 x 7 c m (図 b)



a



b



DENG YUDAN

鄧羽丹

博士課程

太原理工大学 アートマネジメント専攻 卒業
武蔵野美術大学 大学院造形研究科 修士課程 美術専攻
美学美術史コース 修了

研究内容：水月観音菩薩の研究

いわゆる水月観音は、あらゆる災難から衆生を救済する諸難救済を功德とする観音菩薩の別称である。観音浄土である補陀落山の岩座に半跏坐を組んでくつろぐ姿が一般的である。あらゆる水面に映る月を観音菩薩の功德に見立てた大円相（大円光）に因んだ尊名であり、救済対象である在俗者の衣服また清浄を象徴する白衣（後に浄天衣となる。なお、出家者は色の着いた緇衣を着る）を着けていることに因んだ「白衣観音」、救済の道具である楊柳枝と浄瓶を伴うことに因んだ「楊柳観音」とも呼ばれる。

水月観音菩薩の信仰と造形は、中国の唐時代から認められるが、宋・遼・元時代に流行する。また、諸難救済の功德はもとより、人間味の強い姿勢や慈悲深い造形により、東アジア全域にも拡がり、韓国、ベトナム、日本などでも広く信仰を集めた。中国に現存する作例は、四川省の安岳石窟と重慶大足石窟、陝西省富県石泓寺、山西省大同観音堂観音殿などが認められ、宋時代に定型化した作例が多いが、個々の作品分析や全体像については未だに不詳な点が多く残っている。中国の作品と文献などの諸資料と共に、朝鮮半島で制作された高麗仏画や日本に残されている図像集などの諸資料も参考にしながら、様々な角度から総合的に分析して、水月観音の造形を深く考察するように頑張っている。

水月観音は、楊柳の枝で浄瓶の浄水を降らすことで心身の病気を治す功德をもっているのので、現在の災難も早く終わらせてもらいたい。早く作品の調査に行けることを願っている。

図版

中国四川省綿陽市聖水寺第7号窟、885年（図a）

南無大悲救苦水月観音菩薩像、968年、甘肅省敦煌市莫高窟藏經洞出土、フリーア美術館蔵（図b）

南無大慈大悲水月観世音菩薩像、961年、甘肅省敦煌市莫高窟藏經洞出土、四川博物院蔵（図c）



a



b



c



劉 芯羽

LIU XINYU

修士課程

中国蘇州科技大学 美術学専門 卒業

研究内容

蕭雲從 (Xiao Yuncong, 1596-1673) は中国明末清初の文人画家で、順治 5 (1648) 年に刊行した『太平山水図』は、清初の版画のピーク期の作として評価されている。実際の風景を題材とする、初めての本格的な画家による山水版画の登場で、題名は安徽省の当塗、蕪湖、繁昌一帯の山水景勝の地四十二ヵ所の景色に巻頭の「太平山水全図」をあわせ合計四十三図である。『太平山水図』は絵に併せて、草、隸などの書によって詩文をしるし、さらに古代の有名な画家の筆や技法、構図を模倣して示した。

17 世紀から 18 世紀にかけての東アジア絵画史において、中国の版画書物の流通は、日本や朝鮮の絵画を大きく発展させた。日本では『太平山水詩畫』とも呼ばれているこの画冊は、中国の版画の歴史を発展させただけでなく、日本や朝鮮にも伝わり、日、中、韓三国の絵画交流史上においても、重要な歴史的価値をもっている。この画冊を通じて、日、中、韓の画家の相互理解を増進し、中国画学による伝統思想と文人画の実践経験を広めた。

私は蕭雲從画『太平山水図』を中心に、日本および朝鮮への影響を具体的に分析し、かれらがどのように中国の画風を吸収し、新しい絵画表現を創造したかを明らかにしたいと考えている。

図版

- ・蕭雲從画『太平山水図』の「太平山水全図」武蔵野美術大学（金原・服部文庫）蔵 コロタイプ版 1931 年 2 月（図 a）
- ・『太平山水図』の「天門山図」と実景の写真（図 b、c）
- ・『太平山水図』の「雄観亭図」と実景の写真（図 d、e）

安徽博物院蔵 西涼印社 2011 年 5 月

（写真は 2020 年 7 月に安徽省実地調査を行って撮影したものだ。）



a



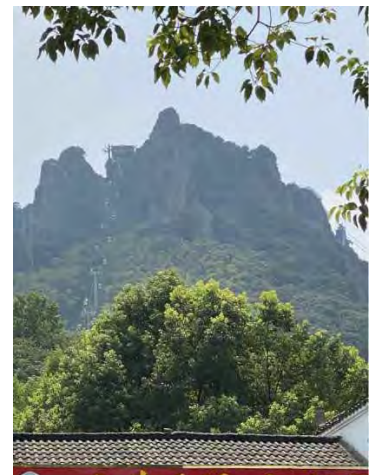
b



c



d



e



西安美术学院 美術史論学部 卒業

研究内容

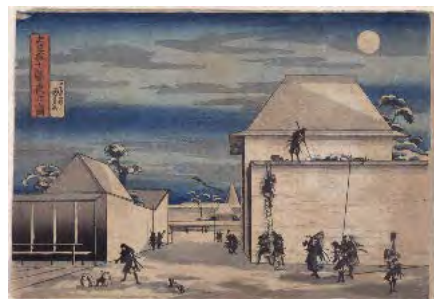
大学学部では、浮世絵における具象的な線について関心を持ち、卒業論文のテーマとしました。武蔵野美術大学大学院留学後も、浮世絵における光と陰影に関する研究を継続しています。私が考える「具象的な表現」とは、光のような二次元では表せない非物質的な自然現象を線や面によって表現することです。例えば、19世紀前半の歌川国貞の「星の霜当性風俗 行灯」（大英博物館蔵など）を見ると、光と影、明と暗の対比が画面を主要な部分と副次的な部分に分割しています。具象的な表現が、光に対する敏感な意識をもって表されていることがわかります。また、浮世絵において光と影の具象的な表現は、江戸時代における照明情况进行のみならず、社会と経済の発展状況も表していると考えられます。

18世紀初めの日本における蘭書の輸入の解禁によって、江戸時代の日本美術は多大な影響を受けました。浮世絵における光と陰影の表現は、線的な区分表現から、面的な陰影表現に変わりました。例えば1831年～1832年制作の歌川国芳の「忠臣蔵十一段目夜討之図」（神戸市立博物館蔵）は、1682年「東西海陸紀行」（神戸市立博物館蔵など）を原本とする作品です。本作は、洋風表現の影響を受けながら、雲と樹は伝統的な様式を保ち、西洋的なものと日本的なものを併せ持ちます。

歌川国芳ら浮世絵師たちが、輸入されたオランダの書物に深い興味をもち、特に西洋画における陰影表現を合わせ、浮世絵に独特な光と陰影を探究したことが認められます。蘭書の輸入とともに変化していった、18世紀末～19世紀の浮世絵における光と陰影に関する表現の変遷を明らかにしたいと思います。



a



b



c

- 歌川国貞『星の霜当性風俗 行灯』1818～1820年
36.9×24.9 cm 大英博物館（図 a）
- 歌川国芳『忠臣蔵十一段目夜討之図』1831～1832年
25.4×37.2 cm 神戸市立博物館蔵など（図 b）
- 『東西海陸紀行 蘭語版』ニューホフ著 アムステルダム刊、1682年、39.0×25.0 cm 神戸市立博物館（図 3）



YU TIANHUI

于 天荟

修士課程

長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科 博物館学専攻 卒業

研究内容

ルネ・マグリット (1898-1967) は 20 世紀ベルギーを代表する文化的ヒーロー、モダンアートを代表する芸術家の一人である。私たちの認識の中で、マグリットはシュルレアリスムの画家として分類され、ディペイズマンという技法でイメージを本来の文脈から切り離し、別の文脈の中に転置すること、事物の組み合わせによって多くの絵画を制作した印象に過ぎないかもしれない。確かに、マグリットは現実ではない様な夢の世界を思わせる雰囲気が溢れる作品を多く描き、そこで夢において発生した無意識を重視するシュルレアリスムの考えと一致する。しかし、実はその作風が初期の絵画スタイルの模索期に過ぎなく、その後のマグリット自身は現実を用いて、方法論で現実疑問を投げかけることを目的とし、夢より現実世界を重視していたと考えられる。

また、マグリットの作品はディペイズマンを主な技法としていと言われている。シュルレアリスムにおける多くの画家は夢の世界或いは非合理・非現実的な世界を創る為にディペイズマンを用いた。マグリットの初期の作品には当てはまると言えるかもしれないが、1930 年以降の作品は様式、作風が大きく変化したこともある。1898 年に生まれ、1967 年に亡くなっているマグリットは 19 世紀末の洗礼を経て、2 回の世界大戦も経験し、彼の画家としての生涯は同じく多様で激動のものであると言える。多作の画家として、個人スタイル強いシリーズ以外、様々な作風への模索と挑戦する実験的な時期も多かった。例えば、「陽光に満ちたシュルレアリスム」と呼ばれる第二次世界大戦中のルノワールの時代、またはその後のヴァッシュの時代など。同様にこれらの作品も研究の価値が高いと考えている。

これから 2 年間の学習と研究の中で、マグリットの画家としての生涯あるいは作品様式・作風の変化を分析し、そして作品の中に含んでいる詩人の様な思想、哲学への意識などについて考察したいと考えている。シュルレアリスム中の位置を明らかにし、または画家としての重要性を再証明することが目標である。



a



b



c



d

- ルネ・マグリット《秘密の競技者》1927 年、カンヴァースに油彩、152×195cm ベルギー王立美術館 / マグリット美術館、ブリュッセル (図 a)
- ルネ・マグリット《恋人たち》1928 年、カンヴァースに油彩、54×73.4cm ニューヨーク近代美術館 (図 b)
- ルネ・マグリット《第 1 日》1943 年、カンヴァースに油彩、59×53cm 個人蔵 (図 c)
- ルネ・マグリット《ストロピア》1943 年、カンヴァースに油彩、60×50cm 国立近代美術館 (ポンピドゥー・センター)、パリ (図 d)



武蔵野美術大学 造形学部 視覚伝達デザイン学科 卒業

学生時代から作品のテーマに仏教美術を選ぶことが多く、卒業制作では有志八幡講十八箇院所蔵『絹本着色 阿弥陀聖衆来迎図』を参考に、自分なりの阿弥陀来迎図を描きました。在学中に自主制作として執筆した漫画作品がきっかけで朝日新聞出版の編集者の方と知り合いになり、『ネムキ+』という漫画雑誌で漫画家としてデビューしました。卒業後は「夏江まみ」の名前で作家活動を開始し、漫画家やイラストレーターとして活動しています。『マンガで教養 やさしい仏像』（朝日新聞出版、2016年）、『マンガで実用 使える禅』（朝日新聞出版、2019年）の書籍で漫画とイラストを担当し、監修である研究者の人々と接する中で、改めて仏教美術を学びたいと思うようになり現在に至ります。

研究内容

私の研究テーマは星曼荼羅と占星術の関係性についてです。2017年に描いた『astronomicai chart』という作品で実際に星曼荼羅を描いたこともあり、このテーマに関心を抱きました。本研究では現存する星曼荼羅の中で最も数の多い北斗曼荼羅を中心としながら北斗七星・九曜・黄道十二星座・二十八宿などの天文学的要素が仏画として成立する過程を紐解き、星曼荼羅と占星術の関係について見識を深めることを目的としています。星宿の知識は密教経典や図像と共に僧侶から請来されることが多く、宗派によって修法や諸仏の名称・図像・功德などが違います。またインドや中国、西アジア、地中海などの神話や文化の影響もあると考えられるため、国外の星座の起源や天体との関わりも知る必要があります。これらの情報を体系化し、日本の仏教思想にどのような影響を与えたかを知る契機としたいです。

制作

- ・『マンガで教養 やさしい仏像』（朝日新聞出版、2016年12月）(図a)
- ・『マンガで実用 使える禅』（朝日新聞出版、2019年9月）(図b)
- ・『astronomicai chart』（2017年）(図c)



a

b

c



孟 小雅

MENG XIAOYA

修士課程

慶應義塾大学 文学部 哲学学科 美学美術史専攻 卒業

研究内容

20 世紀アメリカ抽象表現主義のカラーフィールド・ペインティング画家であるマーク・ロスコを中心に研究を行なっています。とりわけ戦後アメリカ抽象表現主義を代表する芸術家たちの作品に見られる宗教性、超越性に関してその造形的特徴と歴史的文脈を実証的に考察していきます。

大学ではロスコ晩年にもっとも力を注いだ作品——ロスコ・チャペルについて、そのエキキュメニカル・チャペルの特性と抽象絵画の展示場という二重のアイデンティティを解明させようとしてしました。ロスコ・チャペルと呼ばれる建物は、広く全世界に及ぶ宗教の指導者たちが参集する場所とはいうものの、特定の教義に属さず、ロスコのカラーフィールド・ペインティングとともに宗教的な内実を拭き払ううちにある種の普遍的な宗教体験を伝えようとしてしました。そして、範囲を広げて、ロスコにのみならず、ジャックソン・ポロックやバネット・ニューマンなど抽象表現主義と呼ばれる当時のアメリカ抽象画家たちの製作には、カトリック神学から宇宙的ヴィジョンまでが暗示されていることがわかります。彼らの作品に潜む共通の精神性、あるいは超越性の考察を現在の課題としています。

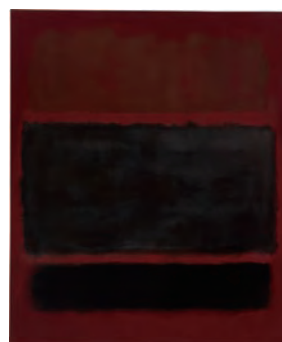
また、絵画にある宗教的次元は従来の宗教絵画に見える世俗的象徴から近現代芸術が求める超越的体験へ進化していきます。それが、純粹抽象と超越的体験との造形的連絡通路に、伝統的な宗教的象徴を完全に排除できるのかどうかなど、抽象芸術と宗教哲学の間に様々な問題がまだ議論に残されています。芸術の精神性と哲学性が注目されている今こそ、これらの課題を解決する価値が見えてくるのでしょうか。



b



c



a



d

- ・マーク・ロスコ 《ディープレッドの黒》1957 年
233.0 x 193.0 cm カンヴァス 個人蔵 (図 a)
- ・マーク・ロスコ《「壁画 No.4」のためのスケッチ》
1958 年 265.8 × 379.4cm カンヴァス DIC 川村記念美術館 (図 b)
- ・バーネット・ニューマン《十字架の道行き》展示風景 (1986 年 6 月 4 日—11 月 15 日「七人のアメリカの巨匠展」より) (図 c)
- ・Photo by Kathleen Buckalew. National Gallery of Art, Washington, Gallery Archives
バーネット・ニューマン《オネメント V》1948 年
152.4 x 96.5 cm カンヴァス 個人蔵 (図 d)



新谷 瑛里子

SHINTANI ERIKO

修士課程

武蔵野美術大学 造形学部 芸術文化学科 卒業

研究内容

ヴェネツィア派の自然表現に現れる、写実的な描写と詩的描写の合わさりによる色彩、筆致の特徴に関心がある。ヴェネツィア派はイタリア・ルネサンスにおいてフィレンツェ派と並んで栄えた流派であり、形体と線描のフィレンツェ派に対し、色彩のヴェネツィア派と区別されている。フィレンツェ派の線透視の遠近感を吸収した15世紀のペッリーニ以降、16世紀にはティツィアーノ、ジョルジョーネらが詩的雰囲気の流れた絵画を成立させる。その中で特に詩的傾向の強いジョルジョーネを取り上げ、自然表現の描写の詳細から、ヴェネツィア派の詩的描写における写実性の特徴を明らかにする。

学部の卒業論文では、ジョルジョーネの自然表現の中から背景にあたる雲を選び、ヴェネツィア派の色鮮やかな世界観から、茶褐色でまとめられた詩的な牧歌的世界観へと移り変わる中で、雲にどのような描写が用いられたのかを推察する「ヴェネツィア派ジョルジョーネの雲」を執筆した。最初にジョルジョーネの絵画における描写の特徴を確認した上で、ユベール・ダミッシュ『雲の理論』（松岡新一郎訳、平文社、2008年）を参照し、線透視図法によって規則づけられたルネサンスの絵画面を壊していくという16世紀の雲の作用とジョルジョーネの絵画を対照させる。

図版

- ・ジョルジョーネ《羊飼いの礼拝》1505-1510年, 90.8×110.5cm, ワシントン・ナショナル・ギャラリー（図a）
- ・ジョルジョーネ《モーセの火の証》1505年, 89×72cm, ウフィツィ美術館（図b）
- ・ジョルジョーネ《三人の哲学者》1508-1509年, 125.5×146.2cm, ウィーン美術史美術館（図c）



a



b



c



安田 菜緒

YASUDA NAO

修士課程

佛教大学 歴史学部 歴史文化学科 卒業

研究内容

京都の神社巡りで、鐺などの日本刀の装飾金具（装剣金具）と出会い、その繊細さと造形のすばらしさに感動し、惚れ込みました。小さいものだとわずか幅数cm、厚さ数mmという限られたサイズの中で、様々に凝らされる匠の技についてもっと知りたいと思い、研究を始めました。学部卒業論文では、装剣金工の中でも、表現力や技術力が他の金工と一線を画していると感じた、江戸時代後期の金工 大月光興（おおつき みつおき）の装剣金具作品を中心に、図案や表現の研究をおこないました。

この学部卒業論文の調査の中で、多くの金工と画家に接点があることがわかりました。例えば、大月光興であれば、沈南蘋や円山派を学び、写実に優れた画家の岸駒との交流があり、岸駒の名がある作品や、光興に下絵を提供したという内容の日記があります。また、光興の作品の表現方法にも、岸駒の筆の特徴が表れているものもあり、このことから、装剣金具の図案や表現に、金工と関係のあった画家の影響があることがわかりました。現在は、この装剣金具と絵画との関係をさらに明確にすることを目標に、装剣金具を製作していた金工たちも関わっている、江戸時代を中心とした、根付、印籠、喫煙具などの装身具のについて広く研究をおこなっています。

図版

- ・大月光興〈象ノ図鐺〉銘：光興印 鉄地高彫 個人蔵（図 a）
- ・田中岷江 木彫根付「親子虎」銘：岷江（花押） H：3.8 cm
大阪歴史博物館蔵（図 b）
- ・大月光興〈虎図小柄〉銘：雍州光興 9.5×1.4 cm
大阪歴史博物館蔵（図 c）



a



b



c